

寛永	一二	一六三九	大友興成記、善忠、参観交代制確立。
〃	一三	一六三六	徳川家光、江戸城完成。
〃	一四	一六三七	毛利藩三の記落成。天守の乱。
〃	一六	一六三九	鎖国完成。
〃	一九	一六四二	毛利高尚、石川玄蕃頭歿す。
慶安	元	一六四八	(一六八九) 榊井沢大炊頭歿す。
〃	四	一六五一	慶安の乱。

寛永一九年は徳川家光、毛利高尚の時代でありました。家康、高政すでに歿して、石川玄蕃頭は天涯孤独の人となつていすした。また主君石川玄蕃頭に從つていた榊井沢大炊頭と同じ生涯をたどつたのでは無いでしょうか。文禄二年(一五九三年)大友義統が朝鮮征伐に罪を得て豊後除國に、佐伯惟定が殉じて伊豫に身を寄せたように。榊井沢と松本とは同じ信州(長野県)ですし、その距離七一五里(六〇〇)の近さでした。

英雄の末路もまたおそれなものです。
 以上は、どこまで想像の域を出ないもので、先輩や会員の方々の御批評を仰ぎたいと思つて、(終)

研究

佐伯の港はどんな働きをしているか

主として本州の流通について

大分県立佐伯堂南高等学校校務
 渡瀬・岡本 市野 瀬 仁
 本会会員

第一章 港の変遷 (つづき)

第二章 釜近川

(三) 船頭町 河岸

百谷川出口

城山の西方に広がる鶴望の水田の中を流れている百谷川は、江戸時代に河川改修工事をしたらしく、「鶴岡村誌」に

鶴岡村字野口及萬畑々ヨリ佐伯町杉谷ニ至ル間二百谷川アリ。延長凡式拾町、往時ハ僅カニ幅僅間餘ノ小溝ニシテ灌排共ニ便ナラズ。故ヨリ夏日旱天ニ際シテハ水橋ヲ枯死セシメ、一夕ヒ洪水ニ遇ハバ忽チ泥濘漲溢、百日ノ勞一朝ニシテ空シカラシムルコト多シトセズ。時ノ大里正深矢雄時深ク之ヲ憂ヘ、藩主ニ請ヒテ之ガ再補ヲ謀リ、即チ文政八年工事ニ着手シ同十二年己丑八月之ガ成功ヲ見ルニ至レリ。幅凡ソ四間、舟運灌排極メテ便ナリ。是レ一ニ睦時ガ辛苦經營ノ結果ナリトス、今楠村氏ノ其徳ヲ頌スル所ナリ。現今ノ百谷川即チ之ナリ。

とある。

百谷川が本流に出る河口に、灘の荷役舟(町手船)を浮かべたのは、土器屋全盛期の頃とをうけた大正年間に入つた頃と考えられる。

当時繁栄した木炭問屋の屋敷(下町)は燃料店主出納廷亮氏(アサキ)が祖父元輔氏を徳ひながら開示して下まつたものによる。この附近に立地條件を及ぼす。佐伯城下町の西の出入口



の位置にある。

二 離の荷役舟は土器屋に較べて距離が非常に近く、便利な位置にある。

三 一部は山も切り削って、頑丈な地盤の道路と住宅や倉庫の敷地ができた。

四 百谷川に沿った岸壁近くの倉庫は昔の御船倉跡で、水深も深く、離の荷積みに極めて便利であった。

六 川へ入口は日洲ができて完全な入江となり、洪水で成くは有るものの、直接香取川の被害と受けにくい場所であった。

以上のような条件から第二の土器屋はふさわしい、水炭問屋の集落地となつたのであろう。また西へ入口の左側集つて来る水炭は大付番匠川上流地域の、宇目、直川、水匠、弥生方面からのモノが主であつた。

繁深の地域には火事が起き易いと云われているが、土器屋にもボヤがあつたように、以前製材所であつた今の出納燃料店の所に火事があつたので、その跡を買つて出納家は現在地に移転した。離の荷役舟(四手船)は四手舟のように、鶴谷橋の上手になつて上り水許氏の炭を積み、

出納、河野、安部三氏は南側へ川口で積荷した。一俵へ貫入の水炭を百俵も積む舟が、多い時は三十艘もひしひしといて水炭を積んでいたという。四軒ともいづれ芳らぬ姿本をもつて、手広く取引をしていたようである。

若い時から離の荷役舟に乗り、そして大阪行きの大帆船の船主となつたことのある中鶴八百蔵氏(七七〇)から、釜の出納の水炭は京阪神方面でも評判が良かったと聞かされた。出納氏は話してみると、水炭の生産地は水匠村、小川の土のであつたか。今でも出納家は水炭の品値をやかましくいい、豆炭もわざ／＼柳城がら取りよせていると代々の商法を披露して下さつた。

興まつた山際に倉庫がある。一定の安部宗正(即氏は田村治村)の出身で、私の家とも取引があつたのか。正月の新年王は豪華なもので、毎年染し及びしていたことを憶えている。

船頭所川

「明治四年頃 佐伯藩時代産穀園」にある。前石、お作事、札場はそれぞれ毛羽藩の重要な船着場であつた。前石が藩主の専用で、札場が藩士の使用に、お作事が藩の船の修理や船道具の収納所となつていた。また、船頭所や家屋の石垣は堅固で美しく、城壁のように築いてある。原木の伐採を禁ぜられていた藩政の頃は、香取川の舟積も今より緩慢であつたであらう。改修工事以前香取川の流氷は、お作事附近に突き当り水深を深め、岸壁に生えた梅檀や楠、榎の影を大きく映していた。御土の馬家が描いていることから船頭所川の風景は、美術の点ばかりでなく、歴史的な資料としても後世の人に貴重なものとして残るであらう。

お作事

藩士の遠城寺家より嫁を迎えた石田豊氏は立地条件のよいお作事跡に、大正五年水炭問屋を創業した。始め、氏は藤河内渡谷近くの国有林松下で、藤水家の勘場を働いた。以来独立して問屋業を拡張し、土器屋の戸板氏の後を引き継いで、明治三十八年設立の南海部郡水炭同業組合の長となつた。又戦後は大分市新川にあつた大分県林産燃料株式会社(株)の責任者となつて活躍したこともある。お作事の手帳によると、大分市であつたと思ふが、その後、佐伯南郡地域の水炭の生産が、県下で群を抜いていた実績があつたからでもあらう。

訪問して、い左衛門の資料及び次ノモノであつた。

一、石田 豊 大正五年開業

場所 裏はち作事跡へ（毛利藩の権の作事場）

二、木炭取扱業者

佐伯町 川野弥五郎（川野雄一） 出秋元輔

山口秀十郎、石田 豊、岩崎精一

鶴岡村 坂本惣五郎、宮崎佐市（太比屋）

木許勘藏、岩木虎藏、丸鬼——

下堅田村 富虎——、深矢長太郎

青山村 汐月利三郎

三、生産地

青山村—黒沢、山口 上堅田村—大越

木立村— 重岡村—切込、二本

小野市村—木南、西山 川原木村—赤木、横川

切羽村—堤内、因辰村、畑中村—赤木、宇藤木

六、生産の統制

一、木炭同業組合という統制機関があつて、組合

長の許に検査員と適當敷常置して嚴重なる査

査を行い、合格品には合格の証紙を附した。

不合格品は收容所に集め其所で手入れをして、

再検査をして処理した。

二、何年頃から県管検査に移管して嚴重なる査

査を行ふことになつた

三、品別の種類

樫木の製品、樫小丸、樫割、樫長、樫荒、

雜木の製品、雜小丸、雜河丸、雜荒、杉炭、

四、戰爭中雜木をカソリンの代用、瓦斯用木炭

五、輸出先 主として大阪、次が神戸、次が京都、

六、輸送機関 大阪神戸は船、京都は貨車、

石田氏の屋敷は作事跡という好條件に、番匠川上流

の谷と、堅田川上流の谷との両方の山から林産物が集約

され、ここが接点になつたことである。今の釜海也榎

口医院の狭い道に、朝早くから馬車や牛車音が絶間なく

続き、積み下し、掛声や、馬の嘶きや、馬糞に汚れた

道路や、周回、迷惑をかけたものですと話されて

いた。

○札 場

川下の札場附近にある西田市三藏棟の地に、柴田梅齋

門、西山燃料店の家と、その附近に汐月今朝松氏の木炭

倉庫があり、対岸の池船に岩崎精一氏の倉庫が建ち、と

もに荷役船が往來してゐた。大伴喬近川に沿つた木炭問

屋の倉庫は、この附近で終つてゐるようである。

住 吉の浜

○坂本勘場

毛利公の下御船倉のおとを借り、うけを坂本惣五郎氏の

支店が、住吉に今も古めかしく建つてゐる。当時大番頭

としてい左衛門黒田新藏氏の妻ジュンさん（八十九才）が

ら、四棟あつた屋敷跡を案内してゐた。ここで

製材の撿核も驚き、丸太ものは土器屋から箆で流した土

を陸上にしてゐた。後流しは相當の水量の時を見計ら

つてやつたものらしく、それが一たん大洪水になると、

水我々流災を防ぐため、二十人以上の人手を借るゝに大

わらわであつたそうた。

我々の陸上げや、割いた板を船に積み、阪神方面の瀬

戸内を建築用、造船用に送り出したりするため、坂本氏

お休事附近に当つた水流が跳越にひどくはねられ、池田川の水と合流して水勢を増し、対岸の底と掘つたものと考えらるる。

○池船橋

さて池船橋は一体いつ頃でき、左も右もどうか。山田千之丞氏によれば「明治十三年、久部出身の内田善太郎氏が私費で架けた」とのことである。九十四才の兒玉護氏は、明治七年四月生れで氏が十三才の時橋が落成し、当時十九才の毛利高兼公が渡初めをして、池船の渡守（久部峯）に古なんで池船橋と名づけた——と語つておられ、明治十三年のことは記憶がないようであつた。郷土史家の足田泉氏も、明治二十一年完成し左と云明しておられる。架橋は国防上禁止されてい左とは云え、明治の中葉にやつと架設されたとは、現代の目から見るとなんと悠長なテンポであるうかと驚くばかりである。当時は車は通行は禁止され人の交通が許され、その上有料であつたやうで、洪水があつても真中からはすま



れ、兩岸に竹がれるようにした簡單なものであつた。これでもすいぶん便利となつたもので、船頭所側から渡舟によつていた時は大声で池船の渡守を呼んで待たねばならなかつたから、明治中葉頃の地域に根柢をおよぼして見當がつく。

橋が架つた翌明治二十二年、一帯に船頭所をなめたつた大火があり、昔からの商店もかなり四散し様子も大きく変つた。この年佐伯村は佐伯所と改称した。又翌々年二十四年には佐伯、蒲江間の県道ができたことなど考へ合わせると、池船橋の完成は佐伯地方交易に大きな影響を与えたことである。とくに対岸の池船はその影響をいち早く、また最も多く受けたわけである。

二月の下旬、池船の散髪屋田中洋氏から耳より話を聞いた。「池船は三昧の音が聞こえ、賑やかな時期であつたそうです」と話され、早速この地に詳しい人を紹介して下さつた。その人はすくなく五十四重茂氏であつた。氏は当時の模様を話しながら、きわめて支那に池船周辺の地図を書いて下さつたのが上記へ前頁のと一枚であつたが便宜上分割、且つ若干の取捨を加へる（編者）の地図である。渡守の屋敷、篠崎公園の創設者の家、古い三輪眼科医院、そして料理屋等とどこおることよく見取図ができてしまつた。氏は若くして父を亡くし、長年にあつた料理屋を経営されたので実に詳しい。この図は大伴照和五半頃のようである。当時佐伯町は大分県下第二の芸妓さん数を数えたと云ふことである。参考までに県下各芸妓数をあげると左の通りである。

中津	土、一六〇人	日田	三〇、四〇人
別府	一〇〇人以上	竹田	二〇人
大分	三〇、四〇人	佐伯	六〇、八〇、七〇人
		臼杵	一五、二〇人

料理屋 三十三軒

置屋 兼業一〇軒 専業一〇軒

佐伯の芸妓は四国出身の人が多く、氏は数が多い理由
 だ、佐伯地方の漁手好みの気風を第一の原因におげら
 した。また佐伯のタクシー業者も草分けで、ハンドルを握
 ること五十年、無事長の名運転手で知られてゐる植田久
 助氏を訪ねて見た。当時の主だったお客は、木炭開墾、
 製材業者、浦の網元、村の酒屋、それに阪神方面の商人
 であつたらしい。右の芸妓の数にしては、料理屋、飲食
 店等の水商売は、昭和九年の海軍航空隊の増隊にとよま
 つてその数は激増した。一応軍部の時代はさておき、佐
 伯のこうした歡樂街の繁榮ぶり及、地域の精神的風土も
 さることながら、林産物の生産や流通も、金融の動きと
 けつして無関係ではないはずだ。植田氏は県下の町中を
 車で走つても、昔から佐伯は活況のある生き方町ですと
 とおっしゃつた。

しかしこうした景況のい、反面、当時の木炭問屋と村
 の焼子(炭焼)の關係は、まさに封建的のさい左るもの
 で、地主と小作人、網元と網子の關係以上のものであつ
 たと云われている。こんな話をきくと山村に生まれ左私
 には、狭い世界でなりふりかまわず焼きつづけ左焼子の
 夫婦が家族の顔が目に写るようである。佐伯の芸妓数の
 多く、漁手を繁榮の裏には、矛盾がひそんでいた。この
 ような社会的なしく及は興味のある問題で、今後も研究
 の俵稼となることかろであるが、今んとこ本論の佐伯
 木炭と陸との關係にライトを当てねばならない。

旧明治村に木田發五郎という木炭商人がいた。氏が同
 郷の人々と京都の本願寺参りメ途中、大坂の河口で自分
 の名前のついた炭俵が船に満載されてゐるのを見て、ふ
 んなと驚いたといふ話を聞いた。

また、さきの炭の佐伯木炭が、京都、阪神で評判であ
 つたように、佐伯南郡地方は他地域の黒炭(くろすみ)に
 対して白炭(しろすみ)と云い、よい品質を作り出し、炭
 燒窯の各種研究がなされた。例えは講演会、研究会、品
 評会、他地域の見学、研究録の出版等、官民あけて努力
 をし左結果、五十川式、柴田式炭燒方法の功績も見るこ
 とが出来たのであろう。

またこんな噂もうたわれた。某林業課勤務の高司政三
 技師の作詞。

お城山から見下ろせ

雙後佐伯が真正面

清い流れの番亞川

京で名高い炭ごころ

若山、切込、尾高の

奥で焼いたる木炭が

平和日本の民恩らす

飲んで焼け焼け、焼いて飲め

こうしたエピソードのある佐伯木炭は、県や國の中
 でどんな位置にあるのであろうか。

先ず北極産炭氏の話によれば、戦後大分県で三六〇
 万俵の生産に対して佐伯南郡が九〇万俵と占め、つづ
 いて東国東、下毛、宇佐郡の順位であつた。輸送方法
 としては佐伯南郡のうち、宇目、大野、下毛、宇佐郡
 界外では渡尾島、宮崎は京都行きは汽車輸送であつた。
 海上輸送の中心は大分県の三分の一を占める佐伯木炭
 と国東で、それに宮崎県内海、網島から輸送されたも
 ようである。林業課に大正、昭和の初めに於ける統
 計資料を依頼したが、年度未多忙で手に入れることが
 できなかったが、たゞ佐伯南郡地区で現在まで最大の

生産量は昭和三十三年の九一万三九一八俵で、県下の三分の一を維持していることが分つた。

また高司校師のお話によると、全国的に見れば大分県の木炭生産の位置は僅か五%位で、「宿社に例をとるとキリカン位のまゝである」と、また「主たる生産果の土佐、島根、鳥取が京阪神の中心で、西日本が全国の二分の一を占め、東北が宮城、山形、福島が東京方面へ移出されている。と、もかく木炭生産果とは裏返して云之は後進果ということの意味している」という。話を聞いて御土の地域性と考ふる上は、おもしろい観察だと思つた。

香並川に沿つて船を浮かべた木炭問屋の位置は、池船橋の上行で終り、新下流は長島川や中川川を利用して、鎌野、内田、松垣、古川、成道、野々下、麻生等の梨伐線道路の埋立にもなつて敷地の拡張、機械化による企業近代化大型化が進むはトメた。またこの間、航空線建設のため商業所は軍事所と結合し、林産業の蔡茶もつづくが共に遊映の曲とも化していった。

この頃船頭所の裏の岸辺には、十九九浦の定期船（ハリス）が盛、ひしめき合い、一時は佐伯の商業港としての表玄関の格柄を呈していた。しかしこの通過する木炭と運ぶ荷役船、浦の人々と運ぶ定期船、葛からくる回漕船、蒲江、本水注の大型船、住吉の入江に浮かぶ漁船等各社の船が、それぞれ別の場所に碇泊し、用を足すにはあまりにも水深が浅すぎた。考えてみると、ここら地域が使用不能となるのは時間の問題であつたのを、三角洲を形成する香並川の性質からして当然の宿命である上に、戦争による原木の乱伐がその時期を一層早くした。明治の末年から大正にかけて土器屋港の使用価値が減少し消滅し

たように、昭和二十年を契機に、船頭所、住吉の浜も、使用価値が減少したばかりでなく、港として機能を生かした。

今次の敗戦後、佐伯における民間の船が碇泊する港は、すては河の時代は終り、直接豊後水道の津に当たる港が、佐伯の表玄関となつたのである。

探訪記

竹田から高千穂の古跡をめぐる

—— 佐伯史談会三月の定例行事 ——

高 木 嘉 吉

三月二十三日、竹田から高千穂へと、史跡名勝や奇蹟の跡を訪ねて、快適な一日を過ごした。

竹田、高千穂間は初めてのコースであつた。他の会費もそうして友人が多く、これが今回の旅行の大きな足かたであつた。旅は曾遊の地よし、初めて訪れた地亦よし。それぞれに趣きのあるものである。私は竹田、高千穂間の祖母山を麓をめぐつて九州山脈を横断し、大分から熊本、熊本から宮崎と山岳部を通過するので、山又山、そして密林を縫つて車が走るのではないかと想像していた。しかしこれは全くおぼつかず、雄大な高原、人煙まじな里、きれいな草原の景観に接して、感歎を久しくした。私達が郷土史研究のモットーとしてゐる、実地には確かであることの必要を改めて痛感した。バスにのりながら、平安の昔大神惟基の嫡子高千穂太郎政次の一行が、緒方から三田井の経畧に赴いた道も大体このあたりかと、馬上に鞭を上げる若武者を想つた。

五ヶ所高原のウエストン碑の建つ展望台から、西に河蘇、五岳、北方至近の所に祖母の霊峰、南東はるかには